

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.143 July, 2019

目次

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉

【CAPS CINEMA】

「辺野古の日常から知る沖縄」を開催します1

〈CAPS主催企画の報告〉

【CAPS CINEMA】『幸せの経済学』上映 & 講演会

「グローバル化のなかの地域共生」

法学部政治学科3年 柿本 康介2

〈シリーズ 本を読む〉

カス・ミュデ+クリストバル・ロピラ・カルトワッセル 著、

永井 大輔+高山 裕二 訳『ポピュリズム—デモクラシーの友と敵』

法学部教授 板橋 拓己4

〈2019年度 新規プロジェクトの紹介 第1回〉

パイロット研究

「天然油脂脂肪酸を利用したエステル交換反応による

トレハロース脂肪酸エステルの調製とその応用」

理工学部助教 小河 重三郎5

〈2019年度CAPSメンバー紹介〉6

〈海外出張報告〉

慶應義塾大学 アーミテージ記念教育事業「堅固な日米

関係のための新しい基盤構築」ワシントンD.C.出張報告

CAPSポスト・ドクター 池宮城 陽子7

〈2019年度 招聘外国人研究員一覧〉8

〈CAPS活動報告〉8

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ



【CAPS CINEMA】

「辺野古の日常から知る沖縄」を開催します

【CAPS CINEMA】とは、成蹊大学アジア太平洋研究センター（The Center for Asian and Pacific Studies、略称CAPS）が主催する、アジア太平洋地域を中心とした社会の諸問題に対してテーマを定め、皆さんと一緒に考えていくための上映会です。学生・市民のみなさまのご参加をお待ちしております。（申込不要・参加費無料）

第1回目

上映作品：『辺野古抄』（2018年、132分）

日 時：2019年9月28日（土）14時～17時30分

会 場：成蹊大学4号館ホール

トークセッション：八島 輝京氏（監督）

× 池宮城 陽子氏（CAPSポスト・ドクター）

第2回目

上映作品：『辺野古抄』（2018年、60分ショート版）

『ZAN～ジュゴンが姿を見せるとき～』（2017年、73分）

日 時：2019年10月4日（金）13時～16時

会 場：成蹊大学4号館ホール

解 説：八島 輝京氏（『辺野古抄』監督）



詳細・イベントポスターはCAPS Webサイトの「イベントのお知らせ(CAPSの催し)」に掲載いたします。
(<https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>) 問合せTEL:0422-37-3549

法学部政治学科 3 年 柿本 康介



2019年度



グローバルセッション のなかの地域共生

『幸せの経済学』上映 & 講演会

5/25

(土)

14:00～17:00 (編成 13:30)

成城大学4号館ホール

申込み不要
入場無料
定員200名

13:30 開場

14:00 開会挨拶

14:05-15:15 映画上映

『幸せの経済学』

原簿：『幸せの経済学』 著者：小嶋 隆史



15:15-15:25 休憩

15:25-17:00 講演会
(質疑・応答あり)

17:00 閉会挨拶

〈講演者〉 浅野 隆史

(成城大学名誉教授、成城大学名誉経済学教授)

グローバル社会のなかの地域共生は、グローバル社会の発展、繁栄をもたらす。ローカル社会のなかのグローバル社会は、グローバル社会の発展・繁栄の基盤となる。グローバル社会のなかのローカル社会は、ローカル社会の発展・繁栄の基盤となる。浅野氏の研究は、グローバル社会のなかのローカル社会の発展・繁栄の基盤となる。



主催：アジア太平洋研究センター 後援：成城大学地域共生社会研究センター



成城大学

お問合せ：アジア太平洋研究センター TEL 0662-37-0540

東京国際研究センターTEL 03-3-1100000 www.seiyo.ac.jp/university/



要約を引用すると、「生産者と消費者の距離を短縮すること」である。ローカル市場では、グローバル市場と比べてより多い品目の作物を作ることができるため地元経済が発展する。また、コミュニティの形成が促されるため、人との繋がりが生まれる。つまり、幸福度も増すのである。国々の国際的発展と人類の幸せは必ずしも相関するとは限らない。もう一度今のあり方を見つめ直し、本当の意味での幸せとは何なのかを考える機会を、このドキュメンタリーは与えてくれた。以上が、『幸せの経済学』の概要だ。かなりエッジが効いた内容ではあるのだが、どれも大切なことのように思う。

登壇した浅羽教授は、そんなグローバリゼーションをまず歴史から掘り下げながら見ていった。始まりはなんと500年前で、大航海時代にてコロンブスが新大陸に到達したことが国際化の萌芽であった。そして400年前に株式会社が誕生し、約300年前には産業革命が起こった。更には世界大戦を受け締結されたブレトン・ウッズ協定が国際政治を促進させ、貿易を活発化させた。グローバリゼーションの進行速度は、ここ数十年で加速している。次に、グローバリゼーションの負の側面を実際のグラフや数値から客観的に観察をしていった。まず環境問題を取り上げると、浅羽教授は「短期利潤の最大化を追求する市場に任せては、解決が困難である」と仰った。現実では発生確率の多い目先の問題を優先するため、被害は大きいがすぐさま影響には出ない環境問題は蔑ろにされてしまう傾向があるのだ。その結果、地球温暖化は止まることなく進んでいる。所得格差問題に関しては、日本においてここ30年でジニ係数(所得の格差を表す指数)がほぼ倍に増加している。つまり、

所得格差が広がっているのである。その背景として、収入のない高齢者が増えたことと、収入が比較的少ない非正規労働者が増えたことが挙げられるそうだ。世界各国でジニ係数は上昇の傾向にあるが、日本では特に顕著に表れてしまっている。

このようなグローバリゼーションによる弊害の解決策は、ローカリゼーションである。ひたすらに利益を追い求め経済を発展させるべきではなく、適切な「欲の尺度」が今後求められることになるだろう。そしてこれの解決は、経済学にのみ委ねるのではなく、関わってくる他分野すべてに委ねることが妥当である。浅羽教授は地域共生に向けて、成蹊大学地域共生社会研究所にて、テーマに沿った研究を続けている。テーマは「学融合的アプローチによる地域共生社会の実践スキームの確立」だ。制度や分野における支え手・受け手などの垣根を超え、多様な主体が各々のために参画し丸ごと繋がっていくと地域を共に創りゆくことを目的としている。これはまさに「ローカリゼーション」であり、実際に様々な政策が行われている。持続可能な共生社会の実現に向けてのポイント兼課題として、浅羽教授は地域への自発的・自律的な取り組みと財源措置を上げておられた。

経済的に発展が進む中、幸せの尺度が多様化した。収入が多いから幸せだという方程式は、無くなったのだ。これからの時代では、物質的だけでなく精神的にも発展できるのがいいのではないだろうか。他国を尊重しつつ自国も尊重し、世界の常識に流されず、一人ひとりの持つ多様な考え方を認め合いそれぞれが社会に参加していくことが大切なように思う。



浅羽 隆史氏 (講演者)



会場当日の様子

シリーズ 本を読む

カス・ミュデ+クリストバル・ロビラ・カルトワッセル 著、永井 大輔+高山 裕二 訳

『ポピュリズム—デモクラシーの友と敵』(白水社、2018年4月)

法学部教授 板橋 拓己

本書は、ポピュリズムに関する最新の研究をふまえながら、この厄介な概念を定義し、その現代政治における意味を分かりやすく解説した格好の入門書である。

本書によれば、ポピュリズムとは、「社会が究極的に「汚れた人民」対「腐敗したエリート」という敵対する二つの同質的な陣営に分かれると考え、政治とは人民の一般意志(ヴォロンテ・ジェネラル)の表現であるべきだと論じる、中心の薄弱なイデオロギー」である。

すなわちポピュリズムというイデオロギー(あるいは世界観)の根底には、「人民(ピープル)」と「エリート」の二元論があり、さらに「人民」はひとつの「一般意志」を有しているという前提がある。また、「人民」と「エリート」の区別が道義的なものであることは重要だ。たとえばポピュリストは政権を握ったとしても(=一見「エリート」になったとしても)、「腐敗したエリート」を再定義することで、反エリートの主張を維持することができる。このように「人民」も「エリート」も曖昧で伸縮自在な概念だが、それゆえにポピュリズムはきわめて柔軟なものになりうる。

またポピュリズムは、「中心の強固な」イデオロギー(たとえば社会主義やファシズム)とは異なり、それ自体では現代の様々な問題に対して包括的な解決策を提示することができない「中心の薄弱な」イデオロギーである。むしろポピュリズムは、必ず他のイデオロギーに寄生する。たとえば、ナショナリズムとも新自由主義とも社会主義とも結びつくことができる。

このようにポピュリズムは変幻自在で、それ自体では中身に乏しい。しかしそれはまた、少なくとも二つの明白な敵をもつ。ひとつは、当然ながらエリート主義である。政治は人民の一般意志を表現すればよいのだから、エリート主義は悪に他ならない。

もうひとつの敵は、多元主義である。多元主義とは、政治は妥協や合意によってできるだけ多くの集団の利害や価値観を反映すべきだという考え

方であり、人民／エリート、善／悪の二元論的なポピュリズムとはまさに対極にある。

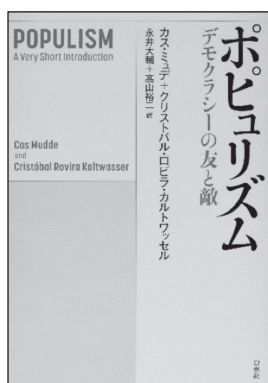
このようにポピュリズムを定義したうえで、ミュデらはその比較政治学的知見を活かして、現実のポピュリズム現象を分析していく。なかでも本書の読みどころは、ポピュリズムとデモクラシーの関係を論じた第五章だろう。ミュデらによると、「デモクラシー」とは「人民主権と多数派支配の組み合わせでありそれ以上でもそれ以下でもない」。それ

ゆえデモクラシーには、「リベラル」なものと「非リベラル」なものがある(リベラル・デモクラシーとは、人民主権や多数派支配を尊重するだけでなく、表現の自由や少数派の保護といった基本的人権の保障を重視するものである)。

こうした区別に基づき、ミュデらは、「ポピュリズムは本質的には民主的」だが、「リベラル・デモクラシーとは相性が悪い」と主張する(強調原文)。ポピュリズムは、極端な多数派支配を擁護し、少数派の権利や多元主義に反対するものだからである。それゆえポピュリズムは、「ある種の非リベラルなデモクラシーを支持するような一連の理念」とされる。

また本書の考察はここで終わらない。ミュデらはさらに一歩進み、民主化ないし非民主化の過程におけるポピュリズムの役割を検討している。その議論の詳細は本書を参照されたいが、ごく簡単に言えば、ポピュリズムは権威主義体制から民主化を果たす際には「プラスの役割」を果たしうるものの、リベラル・デモクラシーを非民主的な方向に押しやる「マイナスの役割」ももっているというのがミュデらの主張である。

リベラルな価値(たとえば法の支配や基本的人権の尊重)を備えないデモクラシーがそもそもデモクラシーと言えるのかという点をはじめ、ミュデらの前提には異論もあるだろう。とはいえ、ポピュリズムとデモクラシーを明確に定義したうえで両者の関係を論じた本書は、今後の議論の叩き台となるだろう。



2019年度 新規プロジェクトの紹介 第1回

パイロット研究「天然油脂脂肪酸を利用したエステル交換反応による
トレハロース脂肪酸エステルの調製とその応用」

理工学部助教 小河 重三郎

代表的な油脂の一つであるパーム油はマレーシアやインドネシアなどの東南アジア地域でのプランテーションの急激な進行から2004/2005年度以降生産量第一位の植物油であり、年々生産量が増産されています。このような中、パーム油の新しい応用開拓やパーム油生産に付随する廃棄物の有効利用法開発が急務であると考えられています。本パイロット研究プロジェクトでは、東南アジアにおいて生産されるパーム油資源を利用した、オーダーメイド医療の構築に重要な“高品質状態でタンパク質を長期貯蔵させられる高性能安定化剤”の開発を目指します。

“シヨ糖脂肪酸エステル”という糖脂質素材は、わが国で大きく発展してきた食品乳化剤や分散剤として利用されている工業製品です。この糖脂質素材はタンパク質の凍結保存や凍結乾燥等の加工プロセスにおいて優れた安定化剤として作用することが報告されています。このシヨ糖エステルを利用することで一般に必要なとされる多量の糖質を添加する必要がなく、ほぼ糖質フリーのタンパク質製剤が製造できると期待されています。他方で、クマムシのアンハイドロバイオシス(乾燥環境下に置かれると仮死状態に陥るが、再び水を添加すると生命活動を再開すること)が糖質トレハロースの蓄積に起因していると考えられたことからトレハ

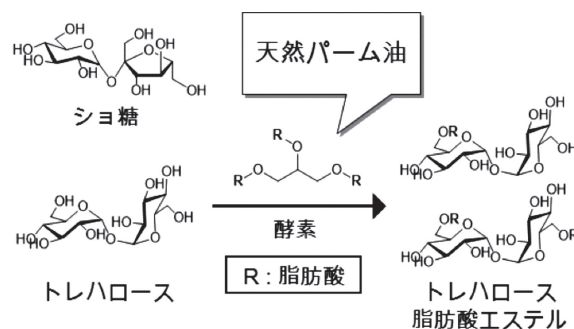


図1 パーム油を利用したトレハロース脂肪酸エステルの調製

ロースに関する基礎研究が近年革新的な発展を遂げており、これまでにシヨ糖には無い、あるいはより優れた多くの素晴らしい特性を有していることが明らかとされています。より豊かでより健康的な生活を実現するため、さらなる高付加価値製品を開発することは意義深いと考え、本プロジェクトでは、シヨ糖の代わりにトレハロースからなる糖脂質が多く面でタンパク質の安定化剤としてより高い効果が望めることに着目しました。すなわち、トレハロースにパーム油に含まれる天然脂肪酸を結合させることで新しいトレハロース糖脂質素材を調製し(図1)、優れたタンパク質安定化効果を与える安定化剤の開発を目指します(図2)。

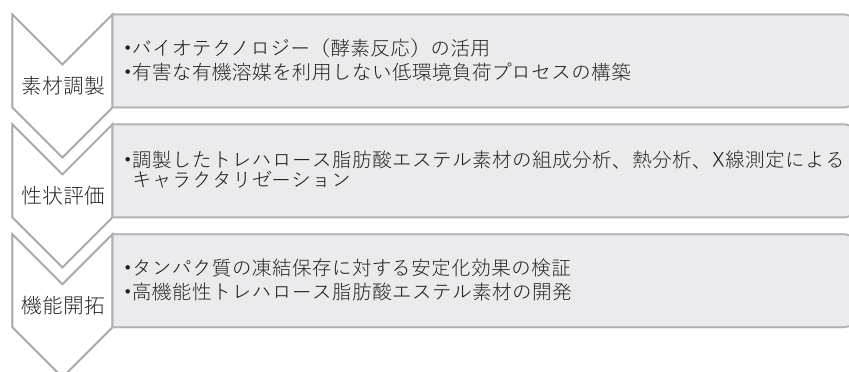


図2 本パイロット研究プロジェクトの研究計画

2019年度 CAPS メンバー紹介

2019年度 CAPS 構成メンバー

所長・運営委員会委員長：高安 健将

運営委員：(任期2年)

経済学部 川越 俊彦(再任)

理工学部 鳥毛 明(継続)

文学部 渡邊 大輔(新任)

法学部 浅羽 隆史(新任)(4～8月)

安部 圭介(新任)(9～3月)

所員：(任期1年)

経済学部 内田 雄貴(新任)

理工学部 戸谷 希一郎(新任)

文学部 金 善美(新任)

法学部 板橋 拓己(新任)

研究員：

主任研究員 惠羅 さとみ(3年目)

ポスト・ドクター 池宮城 陽子(2年目)

事務室：課長 寺西 浩

主査 斉藤 美幸

主査 長橋 典子

原 美弥子

今年度のCAPSは上述のとおり新しい運営委員・所員がメンバーに加わりました。今年で39年目を迎えたセンターは、この新体制の下で更なる発展を目指してまいります。新所員の方々に自己紹介を頂きました。

【経済学部 内田 雄貴 新所員】

今年度からアジア太平洋研究センターの所員になりました経済学部の内田雄貴です。私の専門は政治経済学で、政策決定における有権者間の利害対立が、社会・経済にどのような影響を与えるかについて研究しています。最近の研究では、教育政策に関する世代間対立が少子高齢化社会における経済発展に及ぼす影響について分析しました。微力ながら、センターの発展に貢献できればと思います。よろしくお願いいたします。

【理工学部 戸谷 希一郎 新所員】

自身も成蹊中高出身で理化学研究所を経て成蹊に着任し、今年で12年目になります。2人の娘も成蹊中高でお世話になっており、成蹊学園の気風が大好きです。生体内糖タンパク質の機能について研究をしており、内容はアジア太平洋と直接関係はないのですが、オーストラリアや中国の研究者と共同研究していますので、無理やり関わりがある気になっています。伝統ある当センターの発展に貢献できるよう努めてまいります。

【文学部 金 善美 新所員】

2019年度より成蹊に着任しました、文学部講師の金善美(キム・ソンミ)と申します。専門は都市社会学・地域社会学で、とりわけインナーシティと呼ばれる都心周辺の住工商混在地域を対象に、地域社会の衰退と再生の過程、まちづくり、文化による活性化策などについて研究しています。これまでは主に東京や京都などをフィールドにして

きましたが、今後は韓国や台湾、中国など、アジア圏の都市との比較研究にも取り組んでみたいのです。

【法学部 板橋 拓己 新所員】

わたしの専門は国際政治史・ヨーロッパ政治史で、とくにドイツ政治外交史を研究しています。今年で成蹊大学に来てちょうど10年目になりますが、最初の3年間は任期付きの助教でした。そうした先行きの見えない助教時代、アジア太平洋研究センターには2012年度にパイロット研究プロジェクトを採択していただき、研究を前に進めることができました。所員として、今後「アジ太」に恩返しが少しでもできればと思っています。



第1回所員会議にて
前列左から内田所員、高安所長、戸谷所員
後列左から斉藤、長橋、金所員、板橋所員、寺西課長、池宮城ポスト・ドクター、原

海外出張報告

慶應義塾大学 アーミテージ記念教育事業「堅固な日米関係のための新しい基盤構築」

ワシントンD.C.出張報告

CAPS ポスト・ドクター 池宮城 陽子

2019年3月、出身大学である慶應義塾大学のプログラム「堅固な日米関係のための新しい基盤構築」(アーミテージ・プログラム)の一環として、アメリカのワシントンD.C.を訪問した。日米関係や東アジアの安全保障問題等に取り組む人材の育成という本プログラムの目的のもと、1週間の滞在期間中(3月17日～24日)に3回の研究報告(基本的には3回とも同内容)を行う機会を得た。

ワシントンD.C.到着翌日の18日朝から、ジョンズ・ホプキンス大学ポール・H・ニッツェ高等国際関係大学院(SAIS)でのセミナーにて1回目の研究報告を行った。報告では、博士学位論文をもとに第二次世界大戦後初期の沖縄をめぐる日米関係を主にアメリカの視点から論じた。報告後には、現在の東アジアにおける沖縄米軍基地の位置づけ等について質問を頂戴した。セミナー後のランチの際には、沖縄の離島で英語講師として働いた経験を持つSAISスタッフとの会話を楽しんだ。

2回目の研究報告は、3月19日にアーミテージ・インターナショナルで行った。当該セミナーは、リチャード・L・アーミテージ元米 국무副長官から研究報告に対してコメントをもらうことを目的とした、本プログラムのメインイベントであった。筆者の研究報告では、第二次世界大戦後初期の米国が日本に対して憲法改正を伴う防衛力増強を望んでいたことを踏まえ、当時の米国の対沖縄政策を論じた。これに対してアーミテージ氏からは、今日の沖縄を取り巻く状況を踏まえた場合でも、日本の防衛上の努力が重要であるように思うとのコメントを頂戴した。セミナーに同席して下さった加藤良三・元駐米大使からも、研究報告が対象として扱った時期の日本の外務省の立場等を解説頂くことができた。

3回目の研究報告は、3月21日に、ワシントン・カレッジのアンドリュー・オロス教授の授業時間をお借りする形で行った。ここでの報告に対しては、東アジアおよび日本の安全保障がご専門のオロス教授直々にコメントを頂戴した。オロス教授



アーミテージ氏(右)と筆者(左)

からは、日本側の沖縄方針についてもう少し論じるべきである等のご指摘を頂戴した。セミナー後はオロス教授のご自宅にご招待頂き、夕食をご一緒した。ご自宅のロケーションの素晴らしさと豪華さに、一行はただただ圧倒されたが、とても楽しい時間を過ごすことができた。また、オロス教授からは、学生時代に沖縄を訪問して米軍基地の多さを初めて知ったことが、自らが国際関係論を専攻するきっかけであるという、大変興味深いお話を頂戴した。

ワシントンD.C.滞在中は、この他にも、同行して下さった慶応大学の先生方がスピーカーを務められたセミナーに参加したり、アナポリスにある米海軍兵学校を見学する等、とても貴重な体験を数多くすることができた。

今回の出張を通して実感したのは、英語で研究発信することの重要性、および受け手に合わせた研究報告の必要性である。拙いながらも英語で研究報告することによって、研究発信力は格段に高まるのだということを、身をもって感じる事ができた。自らの研究について議論する人／機会が増える分だけ、研究の精度をより高めることができるはずである。できるだけ多くの研究者と議論するためにも、今後は英語による研究発信に積極的に取り組みたいと考えている。

また、研究報告のやり方についても、その場に

合わせた内容を準備することが不可欠であることを改めて感じた。筆者の研究は歴史研究にあたるため、ワシントンD.C.での報告は、歴史的事実についての知識がないと分かりづらい内容になってしまったのではないと思う。そうならないよう

にと意識したつもりであったが、改善すべき点はまだまだ沢山あると痛感した。今後も、受け手を常に意識しながら、分かりやすい研究報告を心掛けたい。以上のような今回の貴重な経験を、研究者としての成長の糧にしたいと思う。

2019年度 招聘外国人研究員一覧

CAPSの重要な使命のひとつに「国際学術交流の促進」があります。本学での研究を望む海外の研究者を招く制度として、今年度は、以下の1名の方を「招聘外国人研究員」として受け入れます。

受入者 (学部)	名前 (役職)	所 属 (国名)	滞在期間 (日数)	コース	研究テーマ
鈴木 誠一 (理工)	韓 文軍 ハン・ウエンジュン (准教授)	中国農業科学院 草原研究所 (中国)	2020/1/8 ～ 3/7 (60日)	A	Studies on the restoration techniques of the degraded grassland vegetation and soil in northeast Asia.

CAPS 活動報告 (2019.3.16 ～ 2019.6.15)

1. 公開講演会、研究会等

～[CAPS CINEMA]映画上映&講演会～
～グローバル化のなかの地域共生～

開催日	5月25日(土)
タイトル	グローバル化のなかの地域共生
上映作品	『幸せの経済学』
講演者	浅羽 隆史 (法学部教授、地域共生社会研究所所員)
参加人数	168名

～プロジェクト研究会～

開催日	3月27日(水)・3月28日(木)
タイトル	消費者行動における無意識と潜在意識の探究
講演者	有賀 敦紀(広島大学准教授) 井上 淳子(経済学部教授) 石井 裕明(経済学部准教授)
参加人数	3名

2. 研究出張

～海外出張～

期 間	3月17日(日)～3月24日(日)
プロジェクト名	日米安保改定と沖縄基地問題、1953～1960
出張者	池宮城 陽子(CAPSポスト・ドクター)
行 先	アメリカ
目 的	慶応義塾大学アーミテージ記念教育事業：堅固な日米関係のための新しい基盤構築研究報告

～国内出張～

期 間	3月27日(水)～3月29日(金)
プロジェクト名	消費者行動における無意識と潜在意識の探究
出張者	井上 淳子(経済学部教授) 石井 裕明(経済学部准教授)
行 先	広島県
目 的	研究会

3. 会議の記録

開催日	4月16日(火)・6月4日(火)
会議名	所員会議
開催日	4月18日(木)・6月11日(火)
会議名	運営委員会
開催日	6月14日(金)～6月20日(木)
会議名	臨時(メール)所員会議・運営委員会

CAPS Newsletter No.143

2019年7月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>